

【書く・なぞる】俳句 種田山頭火 一

分け入っても 分け入っても 青い山

うしろすがたの しぐれてゆくか

なんにもならん 日がしづかに しずんでゆく

ひとりきて ひとりたべて 草にねる

まつすくな道で さみしい

【書く・なぞる】俳句 種田山頭火 二

手を合わせて 木の実を拾う

捨てきれない 荷物をせおって いる

ぬれて一人 山をもどれば 母がいる

おちついて 死ねそうな 草萌ゆる

しぐるるやしんじつ母を 恋ふるごとく

【書く・なぞる】俳句 種田山頭火 三

いつも人の世が遠くなる 日暮れかな

山をのぼり 山をくだり 草を食う

ふるさとは 遠きにありて 思ふもの

吹かれつつ しづかに歩いて いる

何を求めるでもなく 風が吹く

【書く・なぞる】俳句 種田山頭火 四

酔いざめて 路ゆく山の 青さかな

たつた一人 日のあたる道を 来ている

水音の うるさくて泣く

泣くも一人 笑ふも一人

サイダーの 泡立ちて消ゆ 夏の月